

『関東学院百年史』を読んで

相模 裕一

はじめに

2009年に創立125周年を迎える関東学院は、1884（明治17）年にその出発点となる横浜バプテスト神学校の設立より始まる。その当時の日本は、自由民権運動の激化と分裂により、高田事件、群馬事件、秩父事件など数多くの政府転覆や政府高官暗殺計画が企てられ、政情不安定な時代であった。しかし、同時に日本銀行が設立され、工場払下げによる民間企業の勃興など近代化が急速に行われた時代でもあった。また当時は世にいう鹿鳴館時代であり、欧化主義の流行と相俟って、キリスト教も徐々に浸透していった時代であった。この時期に、神戸女学院、同志社、立教、活水、東洋英和女学院、青山、鎮西、桃山などのミッション・スクールが数多く設立されており、関東学院もこの時期、横浜山手に神学校としてスタートを切ったのである。

本稿で取り上げる1984年刊行の『関東学院百年史』は、特に重要な課題と目的をもって記されたものである。それは自校の原点探しとその確定作業が課題であり、建学の理念の絶えざる継承を明確にすることが目的であったと思われる。

1. 1 百年史執筆の目的

関東学院は、1966年1月27日に創立47周年記念式が行われ、同年、5月17日には開学80年記念式が挙行されている。前者は1919年1月27日の中学関東学院の設立を創立日と思ってなされた行事であり、後者は横浜山手の神学校設立を出発点と考えた行事であった。当時は前者の見方を支持するスタッフもかなりいたようである。1974年に片子沢千代松が大学チャペルで開学90年記念講演「関東学院の源流をさぐる」を行い、横浜バプテスト神学校を原点とすることで創立日確定問題に終止符が打たれたと思われる。

百年史はその片子沢千代松氏が中心になり、関東学院の建学の精神のスタートがその神学校設立日の1884年10月6日に遡る事を明らかにし、論証することが重要な課題であった。そしてその目的は、横浜バプテスト神学校、東京学院、そして関東学院へと、キリスト教精神を教育の基本とするという建学の精神が、間断なく百年間貫いた

ことを示すことにあった。

I. 2 百年史編纂の経過

1975年、関東学院百年史編集委員会が構成され、大学、女子短大、中学・高等学校、六浦中学・高等学校、小学校、六浦小学校、幼稚園、商工高等学校の各校1名ずつ、本部2名が選出された。そして次のような編集方針が決定されている。

1. 創立から、財団法人関東学院が成立して終戦までを、総論的に執筆し、終戦後は、再出発、新出発として大学、短大、中学高等学校、小学校、幼稚園を各校史として加える。
2. すでに閉鎖された英語学校、葉山小学校、女子高等学校、商工高等学校などの調査を行い、学院史に加える。
3. 関東学院の名のもとに成立した霞ヶ丘教会、関東学院教会、磯子ノ丘教会、三沢伝道所、追浜伝道所を学院史に加える。
4. 編集委員会は、1年に4回～5回行い、各テーマのもとに関係者を招待し座談会を開き、史実を確かめ、資料の収集にあたり、編集の参考とする。

以上の方針のもとに、約30回程の委員会が開かれ、各テーマの研究発表がなされた。この委員会で収集した史料や、発表内容、座談会での討論内容は、『関東学院史資料』として1976年11月の第1集から82年6月の第8集まで発刊された。

こうした史実確定調査・研究を基に1982年4月、執筆分担を決め、83年9月末に原稿提出となったのである。執筆者総数は24名であった。

II 関東学院史の内容

本書は1032頁からなる大著であるが、これは大きく「創立から終戦まで」（第1章～第8章）と「戦後から今日まで：関東学院の再出発」（第9章～第15章）に分かれる。前者は449頁であり、後者は582頁である。以下章立てを記す。

- 序章 教育体系の近代化とキリスト教教育
- 第1章 プロテスタントの日本宣教
- 第2章 バプテスト教会の日本伝道
- 第3章 三つの源流
- 第4章 バプテストの神学教育

第5章 バプテストの普通教育

第6章 中学関東学院の設立

第7章 関東学院の成立

第8章 戦時下の関東学院

第9章 関東学院の再出発と新発足

第10章 関東学院大学の新発足

第11章 関東学院女子短期大学の新発足

第12章 関東学院中学、高等学校の再出発

第13章 関東学院六浦中学・高等学校の新発足

第14章 関東学院商工高等学校・英語学校の再出発

第15章 関東学院小学校・幼稚園の新発足

終章 関東学院第二世紀への展望

これより以下で、各章の重要事項または概略を記す。

第1章 プロテスタントの日本宣教

第1章の内容は、明治初期の宣教師の活動とキリスト教教育学校の設立当初の様子が記述されている。この章と続く2章は、関東学院設立以前の日本でのキリスト教伝道活動の記述である。関東学院百年史の一つの特徴は人物重視である。特に第1章から8章にかけては、各章で功績のあった先達を取り上げ、詳細な紹介とエピソードが記され、先達たちの思想と行動をリアルに描きだしている。ここではまず以下の14名の宣教師が取り上げられている。

G. F. フルベッキ (アメリカオランダ改革派の宣教師)	1859年来朝
S. R. ブラウン (アメリカオランダ改革派の宣教師)	1859年来朝
J. H. バラ (アメリカオランダ改革派の宣教師)	1861年来朝
E. W. サイル (アメリカ監督派の長老)	1858年来朝
D. B. マッカティー (アメリカ長老派の宣教医師)	1872年
E. コルネス (アメリカ長老派の宣教師)	1868年来朝
D. タムソン (アメリカ長老派の宣教師)	1863年来朝
J. イング (アメリカメソジスト監督教会宣教師)	1874年
M. N. ワイコフ (アメリカオランダ改革派の宣教師)	1872年来朝
C. カラゾルス (アメリカ長老派の宣教師)	1869年来朝
D. B. シモンズ (アメリカオランダ改革派の宣教医師)	1859年来朝

M. E. キダー（アメリカオランダ改革派の宣教医師）	1869年来朝
W. E. グリフィス（藩校明新館外人教師から東大教授）	1870年来朝
E. W. クラーク（府中学問所（賤機舎）外人教師）	1871年来朝

またキリスト教学校の設立に関しても、以下の22校が取り上げられ、かなり詳しく紹介している。

神学校として開学（5校）

東京一致神学校（明治学院）	1877年	同志社神学校	1875年
三一神学校	1877年	美会神学校（青山学院）	1879年
仙台神学校（東北学院）	1886年		

女学校として開学（14校）

フェリス女学院	1870年	女子学院	1870年
横浜共立学園	1871年	神戸女学院	1875年
平安女学院	1874年	同志社女学校	1877年
立教女学院	1877年	梅花学園	1877年
活水学院	1879年	プール学院	1879年
成美学園	1880年	遺愛女学校	1882年
東洋英和女学院	1884年	大阪女学院	1884年

男子校として開学（3校）

立教学院	1874年	鎮西学院	1881年	桃山学院	1884年
------	-------	------	-------	------	-------

第2章 バプテスト教会（北部バプテスト）の日本伝道

ここでは、アメリカ大陸でのバプテストの発展。そして奴隷制をめぐる南北の対立。さらに「北部バプテスト協議会」と「南部バプテスト連盟」の分裂問題についてふれている。また、バプテストの日本伝道については、J. ゴーブルとN. ブラウンの伝道活動を詳細に取り上げている。そして、バプテスト伝道の特色を以下のようにまとめている。

「日本でのプロテスタントの伝道は、都市のインテリ層（士族階級）を中心に、広まったが、一八八〇年代は、士族階級の解体によって、伝道の地盤は、中産階級の上層から上流人士へと移り、その結果下層農民や、都市の下層から浮き上がってしまったとされている。しかしバプテストは、庶民相手、とくに関東、東北の農村に開拓伝道を行ったのであり、これがバプテストの特色でもあったのである。」（『関東学院百年史』84頁）

さらにバプテストの教育事業について触れ、駿台英和女学校、聖教学校、捜真女学校を取り上げ、聖教学校の教師でバプテスト教会に貢献した以下の4人の略伝を記している。

植山寿一郎 (1877-1944) 伊達 謙 (1848-1908)

小林 健次 (1848-1921) 鈴木 重威 (1847-不明)

第3章 三つの源流

関東学院百年史で最も重要な章は第3章であり、以下の文章が百年史の要である。

「関東学院は3つの源流があり、まず、第一の流れと第二の流れが合同して一つの流れとなり、さらに第三の流れが、これに加わって一つの本流となって関東学院が形成されている。」(127頁)

ここでは、以下の3校の紹介と3校長の略伝が記されている。

第1の源流：横浜バプテスト神学校 1884年10月6日 横浜山手64番地

A. A. ベンネット校長の略伝

(生い立ち・学生時代、牧会、神学校設立 その他の活動)

第2の源流：東京中学院 (東京学院) 1895年9月10日 東京築地居留地42番

渡瀬寅次郎院長の略伝

第3の源流：中学関東学院 1919年1月27日 横浜市三春台

坂田祐院長の略伝

第4章 バプテストの神学教育

1) 横浜バプテスト神学校

「基督教への邪教観が支配的な日本においては、日本人への伝道は、日本人の伝道者によることが最良である。」と考え、100人の信者よりも一人の伝道者の養成に力を入れる。神学校の設立、進展の様子と神学校教師達の紹介を行っている。

C. H. フィッシャー (1848-1920) C. K. ハリントン (1858-1920)

J. L. デーリング (1858-1916)

また、主な卒業生21名の略歴が紹介されている。このなかには、南部バプテスト派の教会でも活躍した藤沼良顕、下瀬加守、尾崎源六や、のちに西南学院高等学部神学科教授となった高橋楯雄の名が挙げられている。



▲日本バプテスト神学校1916年度卒業式：最前列右から1人目ホルトム、2人目高橋楯雄、4人目が日本バプテスト神学校校長テンネー（後に関東学院設立者）、左端にボールデン（後に西南学院第3代院長）。前から2列目右から1人目グレースット、4人目千葉勇五郎、5人目坂田祐（後に中学関東学院院長）、左から2人目ウワーン（後に西南学院第3代理事長）〈関東学院所蔵〉

2) 日本バプテスト神学校

横浜バプテスト神学校と福岡バプテスト神学校の合併問題。日本バプテスト神学校は横浜の神学校から24名、福岡の神学校から10名参加し、発足する。ここでも神学校の教授陣と卒業生が紹介されている。第9回生にのちに西南学院高等学部神学科教授、日本バプテスト連盟理事長となる熊野清樹の名がある。

第5章 バプテストの普通教育

1886年「学校令」と1890年の「教育勅語」による教育の国家統制と国家主義の台頭する中、中学卒の伝道者養成を考え、1895年に東京中学院の設立。1899年に新校舎を建て、東京学院とする。東京学院の教育方針と教職員の紹介が記されている。

E. W. クレメント (1860-1941) H. B. ベニンホフ (1874-1949)

J. F. グレースット (1883-1945) H. タッピング (1857-1942)

大島 広 高井 直貞 岩村清四郎 鈴木半治郎

第6章 中学関東学院の成立

1919年1月27日 中学関東学院の設立。坂田祐が院長となる。入学式の院長告辞で述べた「人になれ」「奉仕せよ」が学院教育のモットーとなる。関東大震災の被害と復興について詳細に記載されている。

第7章 関東学院の成立

1927年 財団法人関東学院が組織され、東京学院が合併して、その組織の中に入り、高等学部（社会事業科、商科）と神学部となる。また中学関東学院も、組織の中に入り、中学部となる。29年高等学部の名称を廃して、商科を高等商業部、社会事業科を社会事業部と改称。

この神学部の最初の卒業生に後の西南学院の理事長で西南学院バプテスト教会牧師となる故木村文太郎先生がいたのである。

激動期の関東学院としての問題は、「神の国運動」（1930年）とS・C・M（学生キリスト者運動）による影響である。これにより学生の検挙事件（軍国主義高まる中、社会事業部と神学部の多くの学生が検挙される。）が生じたのである。

35年3月、社会事業部の廃止、37年神学部は青山学院神学部と合併し、学生委託、神学部廃止。

第8章 戦時下の関東学院

戦争下のキリスト教教育の困難さと「国家総動員法」への順応が記されている。しかし、学則規定「本校はキリスト教の精神を以て教育する…」の削除要求に対しては抵抗している。種々の干渉や圧迫にも拘わらず、礼拝と聖書の授業と讃美歌を止めることはなかったと記されている。坂田院長は、戦時下において、礼拝の時、また始業式、入学式、卒業式、生徒出陣の壮行会その他の行事のときの訓示に、かならず繰り返し述べた言葉は「インマヌエル」であった、とされる。

「インマヌエル、この言葉を胸の底深く秘めて忍耐しよう、死を恐れるな、不平を言うな、そして祖国のために尽くそうではないか、終りまで耐えしのぶものは救われるべし。インマヌエル、全能の神が吾らとともに在し給うのであるという信仰をいだき、光をかかげて時代の暗きを進め」（『関東学院百年史』410頁）

1943年、文部省から学校整備要領が発表され、青山学院文学部、高等商業学部、関東学院高等商業部が明治学院に統合される。このとき関東学院の残置を文部省や明治学院長に陳情していたのが古賀武夫教授であった。この古賀教授は、後の西南学院理事長・学長である。

古賀武夫教授は関東学院に残り、航空工業専門学校の設立にあたる。

1944年学院校内にビクター工場が疎開し、防空通信機材を製作し、体育館は食糧営団の倉庫になり、防衛隊が駐屯。

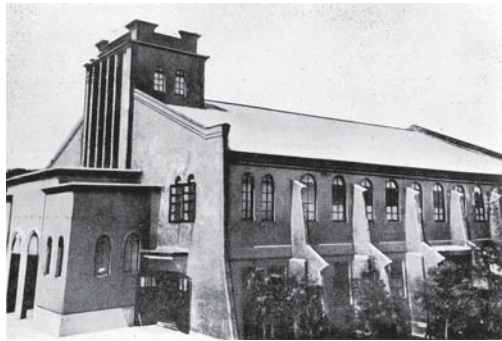
1945年5月29日、横浜大空襲により建物、設備の四分之三を失う。

8月15日終戦

終戦後、校舎拡張のため、海軍の施設の払下げを、海軍省、大蔵省、文部省、そしてG・H・Qに交渉に行ったのは前述の古賀武夫教授である。

8章は以下の関東学院の教師たちの略伝で終わる。

C. B. テンネー (1871-1936)	千葉勇五郎 (1870-1946)
沢野 良一 (1895-1945)	友井 楨 (1889-1962)
D. C. ホルトム (1884-1962)	藤本 伝吉 (1867-1935)
長崎 次郎 (1895-1954)	佐藤 得二 (1899-1970)
山北多喜彦 (1908-1968)	渡部 一高 (1902-1975)
坂西 志保 (1896-1976)	佐々木トシ (1892-1978)
安村 三郎 (1891-1970)	



▲テンネー記念講堂：設立者テンネーを記念して1939年3月に建てられた。残念ながら1945年5月29日の横浜大空襲で全焼した。〈関東学院所蔵〉

第9章 関東学院の再出発と新発足

この章は120頁と他の章が50頁前後であるのに比して長編である。内容は、財団法人から学校法人への切り替えのための組織変更、校地校舎の変遷についてが中心である。校舎の図面、既往研究計画資料一覧、建物等配置図、財産目録、戦災復旧計画書などの諸資料が掲載されている。

また霞ヶ丘教会、関東学院教会、磯子ノ丘教会、関東学院三ツ沢伝道所、関東学院追浜伝道所の歴史と現況が記されている。

第10章 関東学院大学の新発足

1945年9月、工業専門学校への改称と1946年4月、経済専門学校の設立。ところが1947年3月「学校教育法」公布により、専門学校を止め、大学へと昇格することとなる。

1949年、関東学院大学設置される。経済学部（経済学科）と工学部（機械工学科、建築学科）の2学部でのスタートである。これより以下のごとく大学は発展していく。

1950年 工学部に電気工学科と土木工学科が発足

1951年 大学に基督教研究所が開設される。

1957年 大学図書館の落成、図書館の2階に「日本プロテスタント史研究所」の創設

1959年 神学部の設置

1962年 大学院神学研究科設置

1966年 大学院経済学研究科・工学研究科設置

1968年 文学部設置

また、大学での宗教教育は、「基督教学」「基督教史」などキリスト教関係を必修科目とし4年間履修としている。毎日の礼拝、全教職員・全学生の出席も原則となっていた。さらに、教職員祈禱会（毎月曜日）、教職員聖書研究会の実施、YMCAの援助なども行われていた。

紛争期の関東学院大学

1968年 全国的な大学紛争の高まりの中、青雲寮の火災により、66年からの「寮問題」（寮則撤廃、完全自治要求など）が再熱。全共闘系学生による1号館封鎖。

1969年 全共闘系学生による入試妨害、一般学生による全共闘系学生の排除と封鎖解除

1970年 全共闘系学生によるデモ、集会、授業妨害が続く

1971年 全共闘系学生と一般学生や自治会との衝突、9名負傷者。学長補佐の監禁、重要書類強奪、1号館バリケード封鎖、放火、機動隊との対峙。国道16号線にバリケードを築き、1時間交通遮断。

1972年 青雲寮立てこもり学生との衝突、機動隊の出動、岡本学長代行への暴行。

1973年 学生会館占拠事件、武装活動家による学内デモと学生自治会会議への威嚇、妨害。

大学側は全学教授会で制定した「不法行為に対する当面の緊急処置要綱」により、問題学生を処分。1973年の年末には紛争終結する。

神学部の廃止

1968年から1973年の5年間の大学紛争は、神学部内に混乱と教授会に深刻な分裂を生じさせた。教授会の見解「本来大学は普遍的、公共的であるべきものであるから、大学を統合する理念は特定の信仰やイデオロギーであることは望ましくない。それ故キリスト教が大学を制度的に統制する構成原理であってはならず、その意味で『キリスト教主義大学』は原理的に成立しない。」

大学紛争が異常な早さでエスカレートしていく中で、「この大学において神学部は成立しうるか否か、成立しうるとすればどのようなものとして存在すべきか」について毎日のように教授会を開いた。

理事会は「神学部が開設いらいの存立の根拠としてきた点を自ら否定したこと、…」で神学部廃止を決定している。そして1973年の3月31日をもって廃止され、基督教研究所以来の22年間の歴史は閉じられることとなった。

紛争後の関東学院大学については、施設の解体、建物の整備、新図書館の建設、工学総合研究所の開設、国際センターの開設、電算機センターの設立等の紹介が中心的な記述である。

第11章 関東学院女子短期大学

約40年間で8つの期間に分類し、それぞれ各期の特徴付けを行っている。

第1期 創設期（1946－1951）女子専門学校設立

第2期 模索期前期（1951－1957）大学短期大学部に移行

第3期 模索期後期（1957－1962）大学から独立、関東学院短期大学（英文科・家政科・英文科第二部）

第4期 整備期（1962－1966）短大専用校舎と設備の充実期

第5期 転換期（1966－1968）1967年、男子学生がいなくなり、関東学院女子短期大学と名称を変更する。

第6期 発展準備期（1968－1973）「短大の主体性確立」独自の広報活動。

第7期 発展期（1973－1979）女子進学率の上昇、幼児教育科の設置

第8期 充実促進期（1979～）付属幼稚園、定員増の申請、国際交流模索最後に現況報告として、カリキュラム、キリスト教と宗教活動等に触れている。

第12章 関東学院中学、高等学校の再出発

ここでは、昭和20年代、と回顧（その一）（清水武元校長）、回顧（その二）（山本太郎元校長）により、当時の教育理念と実践、経営上の問題等が記されている。最後に現況と宗教教育について述べられている。

第13章 関東学院六浦中学・高等学校の新発足

新制中学校（1947年4月1日）・高等学校（1948年4月1日）の発足。

六浦中学校・高等学校として分離独立（1953年）そして設備および教育内容の充実。大学紛争と中学・高等学校 一部の高校生が紛争の影響を受け、過激な行動に出た。大学紛争中、中学志望者は激減し、1クラス減らす。

六浦中・高の発展 理数コース 校長選考制になる。（校長のクリスチャン条項の削除）

第14章 関東学院商工高等学校・英語学校の再出発

夜間授業の四年制、入学資格を旧制高等小学校とする関東学院商業学校を開設（1940年）。1944年、非常時体制下で、商業学校は生徒募集を中止し、工業学校を設置する。1946年、工業学校は、商業学校と旧名称に復した。1948年、関東学院商工高等学校となる。1960年頃より入学生徒が減少、1970年、生徒募集停止。1973年、商工高等学校廃止。

英語学校は1911年、山手英語夜学校（通称デーリング・スクール）開校、関東大震災で閉鎖。1924年、関東学院英語学校開校。1943年、日米開戦、敵国語の排斥で3月31日授業停止。1945年11月英語学校再開。1954年、生徒数減少で廃校。1947年、関東学院第二英語学校開校。1952年、校舎焼失で廃校。

第15章 関東学院小学校・幼稚園の新発足

関東学院小学校、関東学院六浦小学校、関東学院幼稚園の各校が沿革と建学の精神、学校行事、特別活動（クラブ）、キリスト教教育について記している。

終章

ここでは「関東学院第二世紀への展望」について、学生数や施設規模の増大、教育・研究レベルの向上といった具体的、個別的なことには一切触れず、これからの人類の運命に絶望するのではなく（第2コリント4・8-10）、目標をめざしてしっかり進もう（ピリピ3・13-14）、「われわれの目標は、はっきりしている。キリスト教精神にもとづく人格教育である。」と2つの聖句を引用しつつ格調高い宣言で終わっている。

III 関東学院百年史の特徴

1. 徹底した人物重視の記述

約70名について、生い立ち、キリスト教との出会い、入信、学生時代、宣教活動または教育活動、そして晩年、天に召されるまでを詳細に記述している。日本に骨を埋めた多くの宣教師への感謝と畏敬の念にあふれた記述が多い。また関東学院設立に関わった数多くの牧師、教職員への労苦を讃え、一人一人の生涯を振り返っている。故人のエピソード、好きな讃美歌、聖句などを紹介している。

2. プロテスタントの宣教史として記述

記述は幕末の1859年（日米修好通商条約締結の翌年）から始まる。明治初期のプロテスタント伝道活動を詳細に記述しており、横浜バプテスト神学校設立以前の宣教状況がリアルに描かれている。これは関東学院が「日本プロテスタント史研究所」を有していたことの成果の一つではないか。また自校設立前に教育活動をしていた22校のキリスト教学校についても設立者、設立過程、教育理念に触れている。

3. 客観的な記述

関東学院は設立以来、数多くの試練に会っているが、中でも戦時下の国家主義による統制と大学紛争が大きな試練であろう。本編8章と10章の記述が当時の様子を詳細に示しているが、実に公平かつ客観的な記述である。騒動の渦中にある人物の名前も明らかにされている（現在では個人情報保護の観点で無理かもしれない）。

IV 関東学院百年史への要望

すでに25年前に刊行された書籍に要望というのも変であるが、以下の2点だけ指摘しておきたい。

1. 神学部廃止の問題

関東学院の神学部は2度廃止になっている。1度目は1936年、青山学院の神学部と合併した時であり、2度目は大学紛争時の1973年である。同じ神学部を持つ西南学院の一員として、特に2度目の廃止については、どのような議論がなされたのか関心をもって知りたいところなので少し物足りなく感じた（関係者が現在活躍中で情報を開示するのは難しいとも思われるが）。百年史の前半部分では、建学の理念実現のため、多くの宣教師や牧師、教員の苦闘が語られているのに対し、後半部分の神学部廃止問

題の記述は簡潔すぎるように思われる。

2. 写真が少ないのが残念

刊行のこたばの前8頁が写真のページで、A.A.ベンネット校長をはじめ9名の院長の写真と3枚の集合写真、6枚の建物写真、そして現在(1984年)の役職者9名の写真が掲載されている。1032頁の大著であるので、8頁の写真は少ないように思える。神学校、東京学院、中学関東学院、大学、英語学校など様々な写真があると、イメージが持ちやすく読み易くなると思う。

V おわりに 西南学院百年史への提言

ここで3点ほど気づいた事をあげる。

1. 編集委員会の充実

関東学院では大学、女子短大、中学・高等学校、六浦中学・高等学校、小学校、六浦小学校、幼稚園、商工高等学校の各校1名ずつ、本部2名の10～11名を1975年、すなわち9年前に選出している。また執筆者は26名であった。西南学院のスタッフも多くの教職員が百年史編纂に関わることを切望する。教職員の日々の雑務は年々多くなってきているように思われる。かなり早い段階での執筆者の選定が望まれよう。

2. 資料集の充実

関東学院百年史は1巻の大著であるが、西南学院をはじめ多くの学校では2巻～4巻というところが多い。しかし関東学院はこの百年史を作るために、1976年から1982年の6年間に8冊の『関東学院資料集』を作成しており、それらの資料の蓄積の上に百年史は成立している。西南学院でも内容構成の決定と資料収集・編纂のさらなる積み重ねが急務であろう。

3. 自己検証：建学の精神と戦争協力への総括

関東学院、そして西南学院も戦時下において、軍部管轄の学校教練は受け入れつつ、祈りと讃美を行ってきた。軍国主義下での延命としての妥協ではあるが、銃剣と礼拝は相容れないものであり、戦争協力に違いない。これは建学の精神、建学の理念と矛盾しないのか？百年史編纂においては建学の精神とは何かを確認し、戦争協力への反省をなすべきであろう。

最後に、坂田学長の文章「大学の使命」（『湘南評論』1950年2月15日）を記して、本稿を終わる。

「およそ真の文化国家、平和国家を建設するには、学問と教育に依らなければならない。これが為に大学がなすべき事は、科学の研究、即ち真理の探究である。その理は如何なる権力も迫害もこれをさまたげることは出来ない。学問研究の自由は大学に与えられている。そして我等の研究の前述は実に洋々たるものである。我等はよく学徒としての本分を自覚し、研究の自主性を失わず、みずからの思考と判断によって新たな発見をなすべく、独創力を養い如何なる困難を排してもこれを發揮しなければならない。

本学の大学生活は社会科学たる経済、自然科学の応用たる工学の研究が主眼であるが、しかし専門の学究だけにつきるものではない。本学に学ぶ者は実業家となり或は技術家になり或は政治家となり又学者となり教育家となる前に、先ず人間であるべきである。専門の教育と共に、人間教育は大学の重要なる任務である。大学は、高貴にして自由を理解し、良く責任を重んじ社会に国家に人類に奉仕する人物を養成する所である。本学院創立以来『全世界にもまさる』個人の靈性を陶冶し、十字架を負うて奉仕するの精神を涵養せんとして、『人になれ、奉仕せよ』とは、常に高叫して来た基督教に根底を置く校訓である。基督教の根底なくして真の文化国家、平和国家の建設は出来ない。これは我が関東学院大学の確信である。」（『関東学院百年史』595頁）